『和泉式部集』白河院花見歌群についての一考察

金子紀子

『和泉式部集』99番から107番までの九首の歌は、桜の一枝をめぐって帥宮、公任、和泉式部の間でかわされた一連の歌群である。仮に「白河院花見歌群」と呼ぶ。

この歌群は、『公任集』にも同じ歌が収載されている。この歌群については先行研究も多く、和泉式部歌だけでなく、公任歌側からの研究もある。『和泉式部集』と『公任集』とでは，配列と詞書について少々差異があり、大きく解釈を異にしているのである。それらをふまえつつ、和泉式部の物語的構想の点から考察したい。

まず、両集をあげる。

『和泉式部集』（本文　清水文雄校注『和泉式部集・和泉式部続集』岩波文庫　1983）　（傍線は稿者による）

いづれの宮にかおはしけむ、白河院にまろともにおはして、
かく書きて家守に取らせておはしぬ

99われが名は花ぬす人と立たば立てただ一枝ををりて帰らむ（帥宮）

日ごろ見て、折りて、左衛門督返し

100山里の主に知られでをる人は花をも名をも惜しまざりけり（公任）

とある文をつけたる花のいと面白きを、まろが口すさびにうち言ひし

101折る人のそれなるからにあぢきなく見し山里の花の香ぞする（和泉式部）

左衛門督の返事、又、宮せさせ給ふ

102知られぬぞかひなかりける飽かざりし花にかへつる身をば惜しまず（帥宮）

又、左衛門督

103人知れぬ心のうちを知りぬれば花のあたりに春は過ぐさん（公任）

一日、御文つけたりし花を見て、まろなんさ言ひしと人の語りければ、かくぞのたまひし

104知るらめやその山里の花の香はなべての袖にうつりやはする（公任）

返し

105知られじとそこら霞の隔ててに尋ねて花の色は見てしを（和泉式部）

又、左衛門督、陸奥守の下りし頃、それにうちそへたることとぞ見し

106今更に霞の閉づる白河の関をしひては尋ぬべしやは（公任）

まろ、返し

107行く春のとめまほしきに白河の関を越えぬる身ともなるかな（和泉式部）

『公任集』（本文　後藤祥子校注『公任集』平安私家集　新日本古典文学大系28　岩波書店　1994）

帥の宮、花見に白川におはして

29われが名を花盗人とたゝばたて只一枝は折て帰らん（帥宮）

とありければ

30山里の主に知らせで折（をる）人は花をも名をもおし（を）まざりけり（公任）

又、宮より

31知られぬぞかひなかりける飽（あ）かざりし花にかへてし名をばお（を）しまず（帥宮）

返し

32人知れず心の程を知（しり）ぬれば花のあたりに春はすまはむ（公任）

花をも名をもと聞え給へりける御返につけて、道貞が妻の聞えたりける

33お（を）る人のそれなるからにあぢきなく見し山里の花のかぞする（和泉式部）

返し

34知るらめやその山里の花の香のなべての袖にうつりやはする（公任）

又聞こえたりける

35しらせじと空に霞のへだてしをたづねて花の色もみてしを（和泉式部）

返し

36今更に霞とぢたる白河の関をしひては尋ぬべしやは（公任）

一　配列の相違について

まず両集の、配列の違いを確認する。諸研究（後述）でもすでに指摘されているが、細部を改めて確認する。点線の歌が対応している歌である。（字句が少し違う歌もある）

『和泉式部集』		『公任集』	
99	帥宮（贈）	29	帥宮（贈）
100	公任（答）	30	公任（答）
101	和泉（独詠）		
102	帥宮（贈）	31	帥宮（贈）
103	公任（答）	32	公任（答）
		33	和泉（贈）
104	公任（贈）	34	公任（答）
105	和泉（答）	35	和泉（贈）
106	公任（贈）	36	公任（答）
107	和泉（答）		

見る通り、『公任集』の方は公任と帥宮の贈答歌が二回、和泉式部と公任の贈答歌が二回それぞれ繰り返されている。『公任集』29、30番は『和泉式部集』99番、100番と対応する。詞書が違い状況も異なるが、公任が留守の山荘に帥宮が花見に行って桜を一枝持ち帰ったことを詠んだ歌である。『公任集』31番、32番は二回目の帥宮との贈答歌で、『和泉式部集』では102番と103番にあたる。ところが『公任集』では33番の歌が、『和泉式部集』では101番、独詠歌としてこの二回目の贈答歌の前に割り込んでいる。その結果、『公任集』では和泉33番に公任34番が答える形であるもの、『和泉式部集』では逆に公任104番に和泉105番が答える形となり、しかも『公任集』公任34番（答）と『和泉式部集』公任104番（贈）が同じ歌となっている。

以上を見ると、『公任集』は帥宮と公任の贈答のあとに公任と和泉式部の贈答が続くという、すっきりとした構成をとるもので、それぞれの人間関係の中で完結する歌群となっているといえよう。詞書も『和泉式部集』に比べて簡単である。『公任集』は「没後間もない頃、近親者が編纂したか」[注1]という他撰であり、後人が編集したものである。従ってこの白河院の歌も公任歌中心に編纂され、整理されているかも知れない。

一方、『和泉式部集』の方は歌集すべてが自撰かどうか不明であるし、成立時期もわからない。どちらの歌集が先に成立したかもわからないが、両方の歌集に収載されていることで、この白河院の花見は事実であったことがわかる。加えて『和泉式部集』では「陸奥守の下りし頃」という詞書によって、詠まれた時期を示している。すなわち和泉式部は寛弘元年（一〇〇四）の正月に帥宮邸に引き取られ、道貞が陸奥に下ったのがその三月[注2]であるので、一〇〇四年二月の桜咲く頃の出来事だったと考え得る。この二月、三月の出来事だと詞書を通じて主張しているのが『和泉式部集』の99番～107番の九首である。なお、後述するように『公任集』においても重出（511番）と言う形で、36番歌が道貞の陸奥下向時に詠まれたものであると示されている。逆にいえば、この歌群においては、そうした事情は切り

捨てられた形でまとめられているのである。このように『和泉式部集』は詞書と配列によって、『公任集』とは違う場面を見せている。他撰の『公任集』とは違う物語構成が企図されているらしい『和泉式部集』の独自性について、以下考察する。

二　解釈の相違について

まず前提としてこの「花」は桜をさすと解したい。白河院は当時公任が所有していた山荘で、桜の他に梅や紅葉の名所であるが、「花ぬす人」といわれてもかまわないというほどの「花」は、桜よりほかにない。また『公任集』（29番）では「帥宮、花見に白川におはして」という詞書から始まり、この一連の歌のすぐあとに白河と桜の歌が続く（37～39番）。よって「梅」の説をとる解釈もあるが、[注3]本稿では桜狩りの歌群と考えて解釈する。

（一）『公任集』

参考とした『公任集』の各注釈は、ほぼ『和泉式部集』の詞書を引いて補足しているが、ここでは、まず『和泉式部集』との比較ではなく、『公任集』としての解釈を考察する。

29番（帥宮）　歌の詞書には和泉式部が帥宮に同道したと書いてはいない。帥宮は「花盗人と評判が立つなら立っても良い、それでもこの一枝は折って帰ろう」と詠んだ。

30番（公任）　（と帥宮の歌があったので、）公任は「山荘の主にことわりもなく枝を折る方は、花もご自分の名をも惜しまないのでしたね」と返した。公任が不在だったとは書かれていないが、帥宮の歌の「花盗人」の言葉で、山荘の主がいなかったことが想像される。『公任集』の第二句「知らせで」も、帥宮の作為を明確にする。

31番（帥宮）　歌い出しの「知られぬぞかひなかりける」について、引用した本文（新大系本）では「御宿の花を

賞でて盗んだのにいつまでも見つけて頂けないのこそ張り合いなく存じておりましたよ」とあり、花を手折ったことが知られないのが残念との意に解している。

『大納言公任集』（書陵部本）[注4]は「花を愛でる気持ちを理解してもらえないのは残念です。」とし、『公任集全釈』[注5]では「人にも知られないでひそかに咲いているのは、かいのないことです」と、桜を主体としている。このように、誰のどのような「かひ」がないのかについては、諸注で見解を異にしている。

32番（公任） 歌い出しの「人しれず心の程」（『公任集全釈』及び書陵部本「人知れぬ」）[注6]について。『公任集』（新体系本）は、「油断のならない花への御執着がよく分かりましたから」とあり、『公任集全釈』では「人にも分からない宮の花をいつくしむ深い心のほどを」といずれも帥宮の花を賞美する心の内を詠んでいると解釈している。ここまで、帥宮と公任との贈答歌である。

33番（和泉式部） 詞書によれば、和泉式部が、帥宮の歌31番に付けて詠んだ歌である。後に詳しく述べるが、この歌は『和泉式部集』と関連させて解釈すると複雑になる。一方で『公任集』では帥宮の「折て帰らん」に対し、公任が「折人は」とこたえたのみで、詞書に再度花を折ったとする言及がない。従って、「折る人」については、いずれも帥宮のことを言うと考えるのが妥当であろう。『公任集全釈』の「花を手折った方が宮様だったからこそ、それほど素晴らしくも思わなかった山里の花が、今も香りのあせることなく、袖にまで移っていますよ」という解釈に従いたい。すなわち「折る人」帥宮をたたえつつ、公任の住居を「あぢきなく見し山里」として、幾分からかいも込めて歌を贈っているのである。

34番（公任） 33番に対し、「山荘の花の香りは誰にでも移るものではない」、暗に帥宮の袖には移るが、和泉式部の袖には移らないと公任は切り返している。

35番（和泉式部）「山里の花を知らせまいと空を霞で隔てていても、尋ね入って花の色をみてしまいましたものを（だから花の香りは自分にも移っている）」という歌意と考えられる。

36番（公任）「今さら人に知られないように霞で閉じて隔てている関を越えて白河院の花を強いて尋ねる必要があったのでしょうか」の意である。花を隠す白河院の霞と、白河の関と掛けている。

『公任集全釈』では「しゐては」を「しのびては」の別本を採用して、「こっそりとお尋ねになることがあってもよいものでしょうか」と訳している。そして白河の関は「公任の白河山荘を指すとともに、奥州に通じる福島県の白河の関を意味する。」として、和泉式部の夫道貞が陸奥の守として下ったことを背景にして詠んでいるとしている。また、36番のみ歌群から独立させ、『和泉式部集』と比較して考察している。他の『公任集』でも白河の関を道貞の陸奥守赴任を関連づけ注を付けている。

しかし、見てきたように『公任集』の「白河院花見花群」中では、和泉式部の夫道貞が陸奥の守として下ったことについて特に言及はしていないし、和泉式部が帥宮邸にいたかどうかも含めて、この歌群の中では詳しい人間関係はわからない。にもかかわらず、この36番が道貞の陸奥下向にからめて解釈されるのは、『和泉式部集』の同じ歌106番の詞書のことが一つにはあろう。またもう一つ考えられるのが、この歌が『公任集』511番に重出していることである。その詞書には「みちさだがみちの国にくだるに、妻の式部がやりける歌をきゝ給て」とある。

511番の前後に続く歌は、白河院の花見とは関係ない。「妻の式部がやりける歌」について『公任集全釈』では、『和泉式部集』「みちのくの守にて立つを聞きて　847もろともにたたましものを陸奥の衣の関をよそに聞くかな」をさすのであろうとしている。一方、清水文雄氏は現存の『和泉式部集』では「めのしきふかやりけるうた」に相当するものが見当たらないとしており、なるほど847番歌が道貞に贈られたかは、『和泉式部集』からは不明である。(注7)

前述のように、『公任集』は他撰であるので、後人が編集するにあたって取捨選択や整理した可能性がある。たとえば、511番の歌は36番とは別に存在しており、一方で29番から36番の歌群は同じ花見歌群として編者によって帥宮（贈）と公任（答）、和泉式部（贈）と公任（答）というように配列し直されたのではないだろうか。

特に36番は、『和泉式部集』では初期百首の97番に入り込んでいる歌である。岩波文庫本の補注にあるように、『和泉式部集』の最善本とされる「榊原本」にはなく、岩波文庫では「村田春海本」によって補ったとある。『校訂本和泉式部集』[注8]によると他にもこの歌を百首に入れている本がある。清水氏は『和泉式部歌集の研究』[注9]において、「いまさらに」の歌は公任の歌であることは間違いないとして、一方百首歌は式部の自撰と見られるので、この歌は後世の竄入ではないかとも考えられるものの、「一応ここにあるものとして扱ふのが、現段階においては妥当な処置であらうと思ふ」としている。なお、清水氏は初期百首を歌の内容から晩年に好忠の形式を学んでみずから撰録したものではないだろうかとしている。

『公任集』内の重出は推察できそうだが、『和泉式部集』中で百首歌と106番に重出する理由は見定めがたく、後人が脱落している歌を作者を間違えて竄入してしまったのかもしれない。

（二）『和泉式部集』

この一連の歌は、花の一枝を「折る」ことを発端として贈答が生まれる。前述のように『公任集』とは配列を異にしており、詞書がより詳しい。

99番（帥宮）「いづれの宮にかおはしけむ、」という出だしは時代設定と人物を朧化した物語的言い方である。そして「白河院にまろもろともにおはして」と、帥宮と和泉式部が同道したことが語られる。次いで「かく書きて家守

に取らせておはしぬ」とあり、山荘の主が留守だったことがわかる。

また「まろ」という自称も、『和泉式部集』全体を見ると珍しく、何らかの意図が考えられよう。

100番（公任） ここでの詞書「日ごろ見て、折りて、左衛門督返し」は重要である。『公任集』では「とありければ」と、歌を主体とする形なので敬語がないのがふつうであるが、主語を公任としていながら、敬語がないのは不審である。これは公任の側から、公任を視点人物として書いているからではなかろうか。すなわち、この詞書の場面は和泉式部から見えない部分を公任の視点から描く、ある種の創意性を考えたい。

そしてここで公任は桜の枝を一枝折って、帥宮への返歌100番につけ歌を贈ったのである。すなわち帥宮が「花盗人」となって折り取り持ち帰った一枝のあとに、公任が贈ったもう一枝が登場するわけである。これは『公任集』にはない展開である。

101番（和泉） 「とある文をつけたる花のいと面白きを、まろが口すさびにうち言ひし」とある。公任が折って贈って来た花が素晴らしかったので、私がふとくちずさんで詠んだ歌とあり、直接に公任へ宛てた歌ではないことになっている。この歌とこの位置に配列されていることは問題を含み、さまざまな解釈が試みられているので、次項において考察する。

102番（帥宮）、103番（公任） 宮と公任の贈答歌である。102番の歌意は『公任集』のところであげたように少しずつ違う解釈がある。

『和泉式部集』岩波文庫本の注では「『上に花を惜しむ思いが』をおいてみる。」とあり、下句の「花に代へつる身をば」は「花と引き換えに捨てたわが身。身には実をかけ、花の縁語とした。」とある。

102番の帥宮の歌は、100番の公任の歌「山里の主に知られで」をうけて「知られぬぞかひなかりける」とし、103番公

任の歌は「人しれぬ心のうちを知りぬれば」と答えている。山荘の主に知られず花を盗むのは、花も身も惜しまぬ行為、ととがめつつ、主の選んだ美しい花が贈られてきた（100番）のに対し、花を惜しむ思いが知られないのはかいのないこと、見飽きることのない花と引き換えに捨てた我が身は惜しまないがと返した（102番）。103番は「知られでをる人」（100番）の「人知れぬ心」、桜を惜しむ心がわかったので、共に花を愛しんで春を過ごしましょうと応じたもの。帥宮の花を思う心を公任が解したとする歌である。

104番（公任） 詞書「一日、御文つけたりし花を見て、」は100番の詞書にある帥宮への返歌につけて公任が贈った花を見ての意である。「まろなんさ言ひしと」「さ」は101番の「口すさびにうち言ひし」歌のことである。それを「人の語りければ」誰かが公任に伝えたとある。（一）で示したように、104番の公任の贈歌は、『公任集』では34番の歌（公任の返歌）である。33番にあたる『和泉式部集』101番は前述のように前におかれているため、贈答の組み合わせが違っている。

105番（和泉式部） 『公任集』（35番）とは少し語句に異同がある。知られまいと一面に霞が隔てている山荘を、尋ねて花の色を見てしまったものをと、詠む。花見の一枝をめぐる歌群はここで一区切りつく形である。

106番（公任） この歌は『公任集』のところで詳述した。詞書は「又、左衛門督、陸奥守の下りし頃、それにうちそへたることぞ見し」とある。道貞が陸奥守になり下った寛弘元年三月であるので、その頃、すなわち山荘の花見から日が経ったころに、公任が道貞の下向にことよせて和泉式部に贈った歌である。いまさらに白河山荘ならぬ道貞のいる白河の関を尋ねてよいものか、とうたう公任の歌は幾分揶揄を含んでいよう。

106番と107番は105番までの歌とは少し時間が経っている。桜の時期は短い。旧暦三月といえば都の桜はもう終わり、山や北の地方に移ってしまったのではないか。この106番と107番は直接白河院の花見とは関係がない。

107番（和泉式部） 106番の「白河の関」は道貞が赴任した陸奥の白河の関をいうが、それを和泉式部は霞の立ち込めた白河山荘の奥にとりなして、「先日は行く春をとめたいばかりに、尋ね入ってしまいました」と切り返す。この『公任集』にはない107番は、『和泉式部集』においては重要である。歌群の最初の歌99番の都の花が咲き始めた頃の白河院での花見、間に花の一枝の贈答、そしてこのゆく春を惜しむ歌で一まとまりになる。99番詞書「…白河院にまろもろともにおはして」で始まる一連のエピソードが、103番「花のあたりに春は過ぐさん」の心を包み込むようにして、107番の詞書「まろ、返し」で、まとまるのである。

三　「折る人」の歌について

この一連の歌は、花の一枝を「折る」ことを発端として始まる。

二で述べたように、『和泉式部集』では、二つの花の枝がある。帥宮が「花盗人」となって折り取り持ち帰った一枝と、そのあとに「折りて、左衛門督返し」と、公任が贈ったもう一枝である。

101番（『公任集』33番）がこの歌群の一番の問題となる歌である。一つは「折る人」の歌の解釈である。またそれにより、「あぢきなく」の解釈も変わってくる。また、なぜ和泉式部はこの歌をここに配列しているかということである。当該の歌をもう一度ここにあげる。

『和泉式部集』

日ごろ見て、折りて、左衛門督返し

100山里の主に知られでをる人は花をも名をも惜しまざりけり（公任）

とある文をつけたる花のいと面白きを、まろが口すさびにうち言ひし

101折る人のそれなるからにあぢきなく見し山里の花の香ぞする（和泉式部）

『公任集』

「花をも名をも」ときこえたまへるおほん返りにつけて、道貞がめのきこえたりける

33折る人のそれなるからにあぢきなくみし山里の花の香ぞする（和泉式部）

まず、『和泉式部集』での歌の解釈であるが、『和泉式部集全釈』[注10]は「折る人」を「公任」、『日本古典全書』[注11]は「宮」、岩波文庫本では「折った人があの方なので」と特定していない。『和泉式部集全釈』の解釈は、「手折ったお方がお方でいらっしゃるのですもの、この桜は折られて時を経たものなのに、いつかわたしが山里で見たままの新鮮な色香がただよって、なんだかあぢけなくなってしまひますわ。」とかなり意訳されており、公任が贈ってきた桜がなぜ時を経たものなのか、わからない。

先行研究も諸説ある。伊井春樹氏[注12]は、『和泉式部集』の本文に従って、帥宮が手折ってきた梅の花を、散るまでの数日間、宮と和泉式部の二人で愛でていて、公任は散りかけたころを見計らってさらに美しく咲き匂う梅の花を歌とともに届けた、というドラマを想定し、解釈は「和泉式部は公任から贈られた山荘の咲き誇った花を見て、すこしからかうことにした。『先日、宮さまと白河へ出かけて山荘の花を見ました折、それほどすばらしいとも思いませんでしたが、さすがに手折ったのが公任さまだけあって、この山里の花もかぐわしくあたり一面に香っております』と詠み、その歌を親王の使いの者にもたせたのである。」としている（注5に同じ）。「宮さまと白河で見た山里の花はそれほどと思わなかったのに」という部分におかしみがあるが、これは「「あぢきなく見し山里の花」という歌意によるものであろう。実際は宮は花盗人といわれようとかまわないというほど花が素晴らしかったので手折って帰ったので

ある。わざと事実を違えた言い方をとることで、今回の花のさらなる美しさをたたえ、これを贈ってきた公任をほめながら、先日の白河山荘の花をわざとけなし、からかうような響きも加わっている。

久保木寿子氏[注13]は、「…『花盗人と言われたって構わない。ただもう美しいこの一枝を』と、物狂おしいほどの花への耽溺として表現される。花の美が強調されるほど、主への挨拶性が強まるのである。これを見て『黙って持ち帰られては、非難されても仕方がありませんね』と無難に返した公任の歌に、まるで絡むかのような歌を、ふと和泉は口ずさむ。『花を折ったのが宮様だから、だからそれほどでもない山里が、花の香りに包まれているのでしょうよ』と」と解している。[注11] この解では公任が数日経ってからわざわざ一枝折ってよこしたという経緯への言及がなく、むしろ『公任集』によった解釈である。

『大納言公任集』（和歌文学大系）[注14]では、「それなる」を宮、公任と両方考えられるとしながら、補注において「折る人があなた（公任）であるからこそ、趣がないと思って見た先日の白川の花の香が、今日は袖に薫っています。」とする。そして「この年は開花が遅く和泉式部が白川に行った三月中旬は開花したばかりで、「あぢきなく」思って見たのである。従って、「あぢきなく」はおもしろくないの意で通じる。また、公任から桜の枝が届けられたのは、『和泉式部集』に「日ごろみて、折りて」とあり、帰京して数日経ってからで、白川で見たものより開花もすすみ香も増していた。そこでつまらないと思って見た山里の花は、この度は格別な人が折ったから、すばらしい香がしていると、公任を意識して詠んだものであろう。」と解説している。ただし、この解釈は見る通り、『公任集』のものではなく『和泉式部集』のものである。『公任集』には、前述のように「公任から贈られた一枝」は存在せず、和泉式部の見たのは帥宮が折り取って持ち帰った一枝であった。

『四条大納言家集』（本文）も『和泉式部集』によって補ったうえで、「今日のお歌をつけて下さった花の枝は折る

人が格別だからでしょうか、また見に行きたくて困るほど先日拝見した山里の花の香がたっぷりと匂うことです」とやはり『公任集』にはない「公任が贈って来た花の一枝」を含めて解釈しており、折る人を、「公任」としている。

『公任集全釈』は『公任集』に沿って、「花が手折った方が宮様だったからこそ、それほどすばらしくも思わなかった山里の花が、今も香りのあせることなく、袖にまで移っていますよ」と解釈している。『公任集全釈』の解釈は、『公任集』の詞書に従うもので、無理がないし、公任の返歌とも照応する。

この和泉式部の101番歌は『新古今和歌集』に入集している。また別系統本にもとられている。

『新古今和歌集』巻第十六　雑歌上　（新大系）[注15]

敦道の親王の供に、前大納言公任白河の家にまかりて、又の日、親王のつかはしける使ひにつけて申侍ける

1459おる人のそれなるからにあぢきなく見しわが宿の花の香ぞする

（折ったのがあなたでいらっしゃるので、お話にもならぬものと思っていた我が家が、あろうことか花の香となりました。）

『宸翰本和泉式部集』[注16]

敦道のみこのもとに、前大納言公任の白河院にまかりてまたの日、つかはしける使ひにつけて

88折る人のそれなるからにあぢきなく見しわが宿の花の香ぞする

（花を手折ったのが私のような者だったせいでしょうか、せっかくの白河院の花の香も、ごくつまらぬ私の家の花の香と同じになってしまいました。）

『松井本和泉式部集』[注17]

敦道親王のともに、前大納言公任の白川の家にまかりて、又の日、敦道のみこつかはしけるつかひにつけよとて

205おる人のそれなるからにあぢきなくみしわが宿の花の香ぞする

（花を手折った人が公任卿のような立派な方なので、日頃つまらない所と思っていた私の家が、芳しい花の香を放っております。）

宸翰本、松井本は勅撰集から後に抜粋して編集されたものである。『新古今和歌集』とともに、詞書には式部が敦道親王の使いに託して公任に贈ったとある。『和泉式部集』や『公任集』との違いは「あぢきなく見し山里」ではなく、「あぢきなく見しわが宿」であることである。「わが宿」であると、和泉式部の自らの家をへりくだった言葉として解することができ、「あぢきなく」との続きがよくなる。「みこのもとに」とする宸翰本では、「折る人」を和泉式部として解釈している。

以上のことを踏まえつつ、もう一度『和泉式部集』101番の歌を考察する。

「折る人」は、『公任集』では「帥宮」をさすのが自然である。「桜の枝」は一本しかなく、これを折ったのは「帥宮」しかいないからである。

『和泉式部集』では、100番の公任の歌に、公任がもう一枝折って帥宮への返歌につけたという詞書を付し、101番の歌には「とある文をつけたる花のいと面白きを」の詞書で、公任が贈って来た花への賛美であることを断っている。そして101番の「折る人のそれなるからに」は公任に対する敬意をいうことになる。「あぢきなく見し山里」は、趣のないと見た山里ということになり、ここで少しけなしておいて、実際には「いと面白き」であるから、そこに咲く花の美を今回の公任からの一枝でよくわかったと褒めたのである。そして、直接に公任に宛てたのではなく、「口すさび」という構えをとる。この歌をもれ聞いた公任は、「あぢきなし」と言われた山里を逆手に取って、104番で「その山里の花の香りはだれにでも移るわけではない」と帥宮には移るが和泉式部の袖には移らないという意を含めて、切

り返している。帥宮は花盗人と化すまで愛でた桜だが、そのよさをあなたはわからなかったらしいが、桜の方で区別したというのであろう。貴顕の歌人と道貞の妻に過ぎない和泉式部が対等にやり合っている。これぞ贈答歌というものであろう。

『和泉式部集』では「折る人のそれなるからに」の歌がなぜ帥宮と公任の二回の贈答歌の間に配されているのだろうか。先行研究では清水文雄氏「和泉式部正集を構成する諸歌群の形態と性質」(注18)でこの歌群の「折る人」の歌について触れている。

しかし、「おる人の」歌一首の食ひ違ひのもたらした両歌群の特色は、単に一方が式部中心であり、他方が公任中心であるといふ点だけにとどまらない。正集では、公任から最初宮に贈られた歌の付けられた花を見て、口すさびに詠まれた「おる人」の歌となってをり、したがって、これは直接公任に贈られたものではない。いつかは公任の耳に入るかも知れないといふ予想が、全然なかったとはいへないが、いはば独詠的な口すさびであった。それゆゑに、第二回目の宮と公任との贈答の歌のつぎに、「一日御ふみつけたりし花みてまろなんさいひしと人のかたりければ云々」といふ詞書を持った歌と、それに対する式部の返歌とが自然に導かれてくるのである。かうしたいきさつは、贈答歌の妙味とでもいふべきものを伝へてゐばかりでなく、さういふ贈答営為の進められる世界の雰囲気まで感じさせてくれるやうに思ふのである。

とし、『公任集』では、「すべて公任は返歌を詠む立場に立ってをり、その排列は一見機械的・形式的の感が強く、詞書も簡略に過ぎる嫌ひがあるのに対して…」『和泉式部集』は排列も自然で詞書も詳細かつ具体的と、『和泉式部集』の伝本が先に今の形で存在していて、『公任集』が後世の人が編集するにあたって公任中心に歌順が整理され、最後の歌が切り捨てられたと論じている。

清水氏の指摘するように『和泉式部集』の形が先行し、かつ自撰だとする立場を本稿もとるが、そうした場合、興味深いのは全体からうかがえる歌群構成の妙である。

まず、帥宮と花見に同道した和泉式部は、帥宮の折った花盗人の桜も、公任が贈って来た桜の一枝も、二人の歌の贈答をよく知っている。ただし、これらはあくまで和泉式部とは関係なくやりとりされた贈答歌である。99番、100番、103番と花を惜しむ心を「知る」のをめぐって贈答され、103番で花を惜しむ帥宮の心を了解した公任によって「花のあたりに春は過ぐさん」ときちんとまとまっているのである。ここに100番を見ての和泉式部の101番の口すさびの歌が入るのであるが、直接公任に贈った歌ではないとすることで、「あぢきなく見し山里」とやや失礼な歌の響きを和らげている。それと同時に、数日経って公任が素晴らしい桜の一枝を贈り（100番）、さらに後日和泉式部の揶揄の歌のことを伝え聞いてわざわざ公任が贈ってくる（104番）という形で時間を持ち込み、107番「行く春の」につなげている。105番と107番の間にも少し時間が経過しているが、そこは「霞」と「白河院」「白河の関」と呼応させてやはり107番が受け止めている。

また、『公任集』にはない107番歌は、しかしこの歌群の真ん中にある103番と呼応している。花を愛するがゆえに春は花のある白河院で過ごしたい。行く春をとどめたいので白河を訪れたのだ、という形で全体の流れを作っている。

『公任集』では前半は花を惜しむ心をめぐる貴顕二人のやりとり、後半は「道貞が妻」が差し出がましく宮様が折ったからと失礼な歌を贈って（33番）公任にやり返され、最後は白河院の「霞の隔て」から、示唆的に「白河の関」を持ち出し和泉式部に当て付けた公任の歌で終わる。ここに時間の流れはなく、花盗人をめぐっての二組の歌の応酬だけが並ぶ形である。

おそらく「あぢきなく」の解釈が落ち着かないので、『新古今集和歌集』のように、「わが宿」と言葉を変えた伝本

も存在している。また現代の解釈が混乱している原因は、『公任集』に同じ歌群があり、しかも配列が違うことを等閑視して同じく解そうとしたからである。ただし以上述べたように、『和泉式部集』には、『公任集』とは異なるそれなりの必然性があるのである。

四　「まろ」について

『和泉式部集』の歌群の99、101、104、107番の詞書に「まろ」が使われている。

「まろ」は『日本国語大辞典』によれば、人名などに使われるほか、人称代名詞として使われる。語誌として「上代の確実な例は少ないが、中古の文献では、老幼男女、貴賤にかかわらず、広く用いられている。ただし、「源氏」では、発話者は年少の男子に偏り、成人男性の場合は愛情をよせる女性に対して用いられることが多いなど、親密な人間関係を基底にしていることが特徴」とある。

針本正行氏は、「『土佐日記』・『蜻蛉日記』・『紫式部日記』の中の『まろ』はすべて会話もしくは消息の表現であり、自己の存在、あるいは、自己の行動を聞き手に承認、確認をさせる機能を有するものである。表現主体は男女の区別、卑賤、年令の区別はないといえる。ただ、三作品で六例しか用例が見出されないのは、「まろ」が散文用語として熟していなかったためとも考えられる。」とする。[注19] 言及はされていないが、『和泉式部日記』にも一例ある。帥宮が出家の意志を示し、「かしこにゐてたてまつりてのち、まろがほかにも行き、法師にもなりなどして、見えたてまつらずは、本意なくやおぼされん」と語る場面である。この「まろ」も、針本氏の「会話…の表現」「自己の行動を聞き手に承認、確認をさせる機能」といえるであろう。

では、物語の中ではどう扱われているか、例を見てみる。特に、自称としての「まろ」が出てくる物語は、『落窪

物語』、『うつほ物語』、『源氏物語』である。『落窪物語』には一人称で25例あり、その他に「まろら」という複数形もあり（2例）、下仕えの女房の名前「まろや」（2例）というのも出てくる。発話者の半数は落窪の君の夫となる、右近の少将道頼であり、女性では北の方、女君、あこぎなどである。『うつほ物語』には46例あり、他に和歌に詠まれている1例がある。発話者は家忠、あて宮、忠康、仁寿殿、仲忠、凉、五の宮、いぬ宮などである。

『源氏物語』では、37例ほどある。発話者を詳しく見ると、源氏10例、匂宮6例、薫4例、鬚黒3例、夕霧2例と、25例までが、源氏は無論のこと、それぞれの巻で主役級の男性の発話になる。他には女性で小君3例（帚木、空蟬）、雲居雁3例（少女、夕霧）が複数例で、娘（玉鬘）、二の宮（横笛）、紫の上（御法）、侍従（浮舟）、浮舟（浮舟）、中宮（手習）がそれぞれ一例である。

このように見てくると、「まろ」は物語の中では、会話の中でおおむね男主人公の自称として出てくる。女性の発話であっても、男性の会話の中で引用されている場合もある。男性が行動の主体であることと、「まろ」と一人称で語ることとには、関連があるようだ。

次に和歌の例を見ると、まず詞書に「まろ」がでてくる例は見当たらない。和歌そのものに「まろ」が含まれている例は少数であるが見ることが出来る。『古事記』（中巻　応神天皇（『日本書紀』巻第十　応神天皇十九年の冬十月の戊戌の朔）、『伊勢物語』二十三段、『曽禰好忠集』347、572、『蜻蛉日記』巻末歌集、『和泉式部集』1386が、「まろ」を詠み込んでいる歌である。

このほか、「まろが父」、「まろがたけ」、「まろが身」という所属の格助詞がついている例や、好忠の「まろ植ゑじ」ぐらいが主格を表している。「まろは人すげ」「まろがまろ寝」などは遊戯的な技巧であろう。このように、「まろ」は、和歌においては自称の意味では用いられにくい語なのではなかろうか。

まとめれば、「まろ」は日常会話の中では老若男女、貴賤を問わず使用されていたのかもしれないが、文学においては、物語では、ほぼ会話の中に使われ、男主人公が自分の行動を表現するときや、ある程度主題にからんで言葉を発している女性（例えば雲居雁など）の会話に見られる。和歌においては、詞書にもなく、歌そのものにもあまり用いられていない。

それでは、和泉式部のこの歌群の詞書における「まろ」はどう理解したらいいのであろうか。

『和泉式部集』ではこの歌群と、すぐあとの108番の詞書に用いられているのみである。なお、この180番もエピソードをもつ歌群の最初の歌である。

そもそも個人の家集の場合、詞書に自称は必要ない。自らの歌だからである。『和泉式部集』の場合は贈答歌でもたいていは相手の歌は記していない。本歌群では、帥宮と公任の歌をも記しており、その二人に対して第三の人物である自分を「まる」とわざわざ称している。

前述のようにこの歌群99番も100番も和泉式部の歌ではない。この贈答歌に和泉式部を関わらせるための詞書に「まろ」が使われ、「まろ」を中心とする贈答歌群であるのを明確にしている。すなわち「いずれの宮にかおはしけむ」と物語めいた世界に読者を引き込み、その中の登場人物である自分を「まろ」と表現する。101番の歌は、「とある文をつけたる花のいと面白きを見て」であれば、ただの詞書であり、自歌を次に示してそこで終わってしまう。しかし、「まろが口すさびにうち言ひし」とすることで、これが二人の貴顕の贈答歌に接した戯れの独詠であるのを示している。加えて104番に「まろなんさ言ひし」と「まろ」を再登場させる伏線でもある。102番103番と貴顕たちの再びの贈答歌で終わるはずの話が、さらに数日経って「まろ」の歌を知ったとして公任の歌が登場し、104番以下の贈答歌に展開するのである。

また、104番以降、公任贈、和泉式部答とう贈答歌になり、最後に107番という『公任集』にはない和泉式部の感慨のような趣の歌が加わっている。

そして最後の107番において「返し」ではなく「まろ、返し」とすることで、「いづれの宮にかおはしけむ」世界に絡み合った「まろ」の物語の終わりを示唆しているのではないか。「まろ」はあたかも狂言回しのごとく登場しつつ、実は桜を思って春を過ごす日々の上に、忘れがたい思いを残しつつも去ってゆく人（道貞）を思う「まろ」の物語に展開させている。愛しているのにとどめ難く散る桜と、思いを残しているのにとどめ難く去ってゆく人とをともに惜しむために白河を訪ねる歌群として、まとめられているのである。

まとめ

以上のように、この歌群は「まろ」という自称で始まり、「まろ、返し」で収束する。帥宮と公任の歌の両方を知り得る環境にあった和泉式部は、自らを「まろ」として登場させ、詞書によって状況を膨らませ、一つの物語のようにまとめた。和泉式部の自身の歌はこの九首のうち三首しかない。『公任集』に到っては二首のみで和泉式部は貴顕二人とは別に公任と贈答する「道貞がめ」に過ぎないのである。ところが『和泉式部集』では、和泉式部は帥宮と共に山荘に訪れ、贈答歌を傍で見る。何気なくつぶやいた歌まで公任卿の耳に入り、わざわざ返歌が来るほどである。むろん彼女が「道貞が妻」だったのは周知のことであるので道貞下向をあてこするような歌も来るのであるが、それをさり気なく「まろ」の物語に回収し、塗り替えている。

鄙びた山荘、美しい桜の一枝、高貴な親王と上流貴族の贈答など、道具立ての揃った風雅な成り行きのなかに、自らを主体とした物語的志向による歌群を和泉式部はまとめたのであった。

注

注1　「和歌文学大辞典」編集委員会編　古典ライブラリー　2014）
注2　「藤原道長『御堂関白記』上」（全現代語訳　倉本一宏　講談社　2009）
注3　伊井春樹「公任と和泉式部―『公任集』覚え書き―」講座平安文学論究　第一輯　1984
注4　『大納言公任集』（中古歌仙集（一）和歌文学大系　54）明治書院　2004）
注5　伊井春樹、津本信博、新藤協三「公任集全釈」（風間書房　1989）
注6　注4に同じ
注7　清水文雄『和泉式部歌集の研究』笠間書院　2002
注8　清水文雄『校訂本和泉式部集』笠間書院　1981
注9　注7に同じ
注10　佐伯梅友・村上治・小松登美著『和泉式部集全釈』正集篇　（笠間書院　改訂版　2012）
注11　窪田空穂校註『和泉式部集　小野小町集』日本古典全書　朝日新聞社（1967）三版
注12　注3に同じ
注13　久保木寿子「実存を見つめる和泉式部」（新典社　2000）
注14　注4に同じ
注15　田中裕・赤瀬信吾校注「新古今和歌集」（新日本古典文学大系11）（岩波書店　1992）
注16　野村精一校注「和泉式部日記　和泉式部集」（新潮日本古典集成　1981）
注17　青木生子校注「和泉式部集」（平安鎌倉私家集　日本古典文学大系）（岩波書店　1969）
注18　注7に同じ
注19　針本正行「和泉式部集小詠歌群の構造―公任集との重出歌群を中心として―」『平安女流文学の研究』桜楓社　平成四）

キーワード
和泉式部、藤原公任、帥宮、敦道親王、桜、花見、白河院、物語、まろ

東京女子大学研究員